ヒッグス粒子の発見

岩崎博行 総合研究大学院大学 高エネルギー加速器科学研究科

総研大サイエンス・カフェ / 湘南国際村アカデミア 2013.07.06 @湘南国際村センター







LHC トンネルは地下約 50 m ~ 150 m にある





CERN (欧州原子核研究機構)



[European Organization for Nuclear Research] は欧州合同の加速器を用いて素粒子物理を探究する研究所 ・年間予算: 1.076MCHF [2008年] (GNPに比例して加盟国が出資する)

・職員数: 2,544人 [2007年12月]

・加盟国: ドイツ, イギリス, フランス, イタリア, スペイン, オランダ, スイス, ベルギー, スウェーデンなど欧州20カ国。

・オプザーバー国:日本、米国、ロシア他3カ国など。

·利用者:8.369人 [2007年末]

・CERNはWorld Wide Web(WWW)の誕生地 [1990年]





- ・LHC加速器
- ・LHC実験の測定器
- ・"ヒッグス粒子"とは何?
- ・どう確認したのか?



10 の整数乗倍を表す接頭語

:	名称	記号	大きさ		
ミリ	(milli)	m	10 ⁻³	0.001	千分の1
マイクロ	(micro)	μ	10 ⁻⁶	0.000001	100万分の1
ナノ	(nano)	n	10 ⁻⁹	0.00000001	10億分の1
ピコ	(pico)	р	10 ⁻¹²	0.00000000001	1兆分の1
フェムト	(femto)	f	10^{-15}	0.000000000000001	1京分の10

	名称	記号	大きさ			
キロ	(kilo)	k	10 ³	1,000	Ŧ	
メガ	(mega)	М	10 ⁶	1,000,000	100万	
ギガ	(giga)	G	10 ⁹	1,000,000,000	10億	
テラ	(tera)	Т	10 ¹²	1,000,000,000,000	1兆	

4つの力

種類	強い力	電磁力	弱い力	重力
源	色荷(RGB) (3種)	電荷 (1種)	弱荷(アイソスピン (2種))質量
強さ	~0.1 (αs)	1/1 37 (α)	10 ⁻⁵ (G _F m _p ²)	$\sim 10^{-36}$ (G _N m _p ²)
到達距離(cm) ポテンシャル]/r + kr	無限大]/r	exp(-m _w r)/r	無限大]/r
粒子名 (スピン)	グルーオン 1	フォトン 1	W±, Z 1	グラビトン 2
理論	QCD	QED		(一般相対論)
ゲージ群	SU _c (3)		GWS理論 SU _L (2)xU _Y (1)	

物質の構成粒子 $(spin = \frac{1}{2})$



クォーク

カの媒介粒子 (spin = 1)

ゲージ粒子

電磁力 $\mathcal V$ W^{\pm}, Z^{0} 弱い力 *g* 強い力

Higgs boson: W/Z & guark & lepton の質量の起源



<u>Large Hadron Collider(大型ハドロン衝突型加速器)</u>

7北電子ボルト(7 TeV)の陽子同士を衝突

バンデグラフ 加速器 (1930 年頃)

静電型加速器 ・放電が問題となり ~10 MV (~1000 万ボルト)程度まで









・ いくつもの加速空洞を通過することによって加速される



獲得するエネルギー

$$E_n = nqU_g$$

 n ギャップの数
 q ビーム粒子の電荷
 U_g 粒子が通過する際のギャップの電圧差

・大きなエネルギーを得るには沢山の加速空洞が必要





 $1eV = 1.6 \times 10^{-19} J$

eV (エレクトロンボルト) 」 (ジュール) エネルギーの単位 真空中において 1V の電位差の間を移動することによって電子が得る運動エネルギ



e 素電荷

$$e = 1.6 \times 10^{-19} C (クーロン)$$

(陽子の電荷は e, 電子の電荷は –e)

1 cal = 4.2 J(1 cc の水を1°C上げるのに必要なエネルギーは約4.2」)

1 kg の重りを 1m 持ち上げるのに要するエネルギーは約 9.8 J



$$eV/c^2$$

$$E = mc^2$$

$$c = 2.99792458 \times 10^8 \text{ m/s} = 3.00 \times 10^8 \text{ ms}^{-1}$$

1J=1Nm=1m² · kg · s⁻²

$$m = E / c^2$$



 $1 \text{eV}/c^{2} = \frac{1.60 \times 10^{-19} \text{J}}{(3.00 \times 10^{8} \text{ ms}^{-1})^{2}} = \frac{1.6 \times 10^{-19} \text{kg}(\text{ms}^{-1})^{2}}{9 \times 10^{16} (\text{ms}^{-1})^{2}} = 1.78 \times 10^{-36} \text{kg}$



- Q. 少ない数の加速空洞で大きなエネルギーを得ることはできないか?
- A. Yes, we can.



- ・周回し何遍も同じ加速空洞で加速される
- ・ 粒子は加速されるにつれ1周する時間は短くなる
- ・ 粒子が通過するタイミングに合わせ丁度よい電場がかかるように時間を合わせねばならない
- ・ 粒子の速度が大きくなるにつれ運動量も増すので、 軌道を一定に保つために磁場の強さも合わせ て変化させねばばらない



q が素電荷 e の場合

 $p(\text{GeV}/c)=0.3B(\text{tesla})\rho(\text{m})$

1 tesla = 10 k gauss 地磁気の大きさ ~ 0.5 gauss = 5×10^{-5} tesla



- ・加速空洞内の電場も時間と共に調整
- ・磁場の大きさは時間と共に変えてゆく







・非相対論的な場合(速度 v が光速 c に比べてずっと小さい場合)

運動量
$$p = mv$$

運動エネルギー $T = \frac{1}{2}mv^2$

・相対論的な場合(速度 v が光速 c に比べて無視できない程度の場合)

運動量
$$p = \frac{mv}{\sqrt{1 - \left(\frac{v}{c}\right)^2}}$$

全エネルギー
$$E = \sqrt{\left(mc^2\right)^2 + \left(pc\right)^2}$$

LHC 加速器 複合体

- ・いくつもの加速器を用いて 7TeV きで加速
- 7 TeV の陽子と 7 TeV の陽子を正面衝突させる



ビーム入射のサイクル



ルミノシティ (Luminosity)

・ 衝突型加速器で最も重要なパラメターは エネルギー と ルミ/シティ

反応の頻度 (N) は断面積 (の) とルミノシティ (L) の積となる



- ・ 反応の断面積は自然が決めた物理量で、我々では変えることは出来ない
- ・多くの反応事象を得るには ルミノシティ を大きくするしかない





実際にはビームどうしは小さい交差角(285 µrad)を持って衝突している 進行方向のビームの広がり 7.55 cm を考慮して計算すると

$$L = 1 \times 10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{s}^{-1}$$

陽子・陽子衝突における断面積

Event rate at L=10³⁴cm⁻²s⁻¹



1回のバン千交差 (bunch crossing) あたりの luminosity は

$$L_{1 \text{ crossing}} = \frac{N_B^2}{4\pi\sigma_x \sigma_y} = 3.2 \times 10^{26} \text{ cm}^{-2}$$

陽子・陽子衝突の全断面積は約 100 mb

$$\sigma_{\text{total}} \simeq 100 \text{ mb} = 1 \times 10^{-25} \text{ cm}^2$$

反応した数

$$N = \sigma_{\text{total}} L_{1 \text{ crossing}} \simeq 30$$

- ・1011の陽子の塊と1011の陽子の塊が衝突したのに反応が起こるのは30程度!
- ・ ほとんどの陽子は何事もなく通り過ぎているということ
- ・それでも陽子・陽子の全断面積は最も大きな断面積

いかに興味のある反応が希少であることが分かる

<u>陽子・陽子コライダー vs リニヤコライダー</u>

一周する毎にシンクロトロン放射で失うエネルギー





電子・陽電子コライーダー

・電子・陽電子コライーダーでは LEP が限界

・半径を無限大にする → リニヤコライダー

<u>陽子・陽子コライダー</u>

・陽子は電子の約2000倍の質量があるのでシンクロトロン放射で失うエネルギーは、 6x10-14 で済む

・ただし、高エネルギーの陽子を曲げることのできる強力な電磁石が必要



pp
$$\sqrt{s} = 14 \text{ TeV} \quad L_{design} = 10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{ s}^{-1}$$



超電導ダイポール磁石



Main Dipole 断面図:2つのダイポール磁場とビームパイプを一つのヨークとクライオスタットの中に入れる 2-in-1 型。Cold-mass部分は超流動へリウムを使って 1.9 K まで冷やす。



The LHC arcs

1232 main dipoles + 3700 multipole corrector magnets

392 main quadrupoles + 2500 corrector magnets

MCS: Sextupole corrector (b3)

MCDO: Assembly of spool correctors consists of an octupole insert MCO (b4) and a decapole magnet MCD (b5)

- MQT: Trim quarupole corrector
- MS: arc sextupole corrector
- MQS: skew quad lattice corrector
- MCBH: Horizontal dipole corrector
- MCBV: Vertical dipole corrector
- MO: Lattice octupole



Radio frequency (IP4)

8 RF superconducting cavities per ring at 400.790 MHz:

2 modules per beam, 4 cavities per module 16 MV/beam at 7 TeV 1 MV /cavity at injection 2 MV/cavity during physics







Beam dump (IP6)



LHC加速器の主要パラメーターのまとめ

主リング周長 陽子ビームエネルギー(入射エネルギー) 最高ルミノシティー (IP1, IP5) バンチ間隔 バンチ数 バンチ当りの陽子数 ビームエミッタンス(7 TeV) 二口径双極電磁石 双極電磁石長、磁場 曲げ半径 回転周波数 RMSビームサイズ(IP1, IP5) **16.7 μm** RMSバンチ長さ(IP1, IP5) ビーム衝突角度(IP1, IP5) 交差平面(ATLAS, CMS) バンチ衝突当りの陽子衝突数 全ルミノシティ-寿命 シンクロトロン放射損失エネルギー

26658.883 m 7.0 TeV (450 GeV) $1.0 \times 10^{34} \text{ cm}^{-2} \text{s}^{-1}$ 25 nsec、40 MHz 2808 / ring 1.15×10^{11} 3.75 × 10⁻⁶ μ mrad 1232台 14.3 m. 8.33 Tesla 2803.95 m 11.245 kHz 7.55 cm **±142.5** μrad 垂直 (ATLAS),水平(CMS) 19 14.9 hour

3.6 kW / ring, 6.71 keV/turn

IR1(ATLAS) and IR5 (CMS)

CERN-LHC衝突点用超伝導四極磁石 KEK-Fermilab Collaboration

磁場勾配= 215 T/m, (ピーク磁場8.4 T) 長さ= 6.37 m 口径 = 70 mm 磁場勾配の精度(制御) : 10⁻⁴ (10⁻⁵) 台数: 16 台(KEK) + 16台(Fermilab)





衝突点ビーム収束磁石:日本のLHC建設貢献 日(KEK)、米(Fermilab)間の国際協力





Relative beam sizes around IP1 (Atlas) in collision

With > 150 bunches per beam, need a crossing angle to avoid parasitic collisions


設計では重心系のエネルギーで 14 TeV のはずなのに なぜ 7 TeV や 8 TeV の運転なのか?

2008年9月19日 大量のヘリウムリークがトンネルに溢れるという事故が起こった

- ・12 kA の電流ラインの接続に問題のあるものが見つかった
- ・本格的修理を終えるまでは 低いビームエネルギーで運転することに決定
- ・2013~2014年に修理

12 kA の電流ラインの接続に問題のあるものが見つかった







Electrical arc between C24 and Q24

Collateral damage: secondary arcs







M3 line

V lines

Collateral damage: magnet displacements



Collateral damage: ground supports



QQBI.27R3

LHC 実験の測定器

ATLAS, CMS (大型汎用測定器)



- 反応が起こった時の
 - 粒子の種類と数
 - その運動量やエネルギー
 - 粒子群全体の形状

を知りたい

→ 複合的な検出器のシステムが必要



-前方へブーストされるので前方のみカバー

-ほぼ全立体角をカバー



<u>測定器への要求</u>:

- -- fast response : ~ 50 ns
- -- granularity : > 10⁸ channels
- -- radiation resistance (up to 10¹⁶ n/cm²/year in forward calorimeters)
- -- event reconstruction much more challenging than at previous colliders



ATLAS







density 0.31g/cm3











- 20 m diam. x 25 m length
- 8200 m³ volume
- 170 t superconductor
- 700 t cold mass
- 1320 t total weight
- 90 km superconductor
- 20.5 kA at 4.1 T
- 1.55 GJ stored Energy





HF lowering: Started in Fall 2006

・大きなユニットで組立、地下へおろす





ATLAS (A Toroidal LHC Apparatus)

CMS (Compact Muon Solenoid)





Length : ~44 m Diameter : ~25 m Weight : ~ 7,000 tons Solenoid : 2 T Air-core toroids Density: 0.32g/cm³ Length : ~22 m Diameter : ~15 m Weight : ~ 12,500 tons Solenoid : 4 T Fe yoke Compact and modular Density: 3 g/cm³







	ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)	CMS (Compact Muon Solenoid)
INNER TRACKER	Silicon pixels+ strips TRT \rightarrow particle ID (e/ π) B=2T $\sigma/p_T \sim 3.6 \times 10^{-4} p_T + 0.01$	Silicon pixels + strips No particle identification B=4T σ/p _T ~ 1.5-6 x10 ⁻⁴ p _T + 0.005
EM CAL.	Pb-liquid argon σ/E ~ 10%/√E +< 0.7% longitudinal segmentation	PbWO₄ crystals (26 X₀ @η=0) σ/E ~ 2-5%/√E + 0.5% no longitudinal segm.
HAD CAL.	Fe-scint. + Cu-liq. Ar (~ 7λ @η=0) σ/Ε ~ 50%/√Ε + 3%	Cu-scint. (5.5 ~ 11 λ) σ/Ε ~ 90%/√Ε +3%
MUON	Air-core toroids (Bl~ 2.5-5 Tm) σ/p _T ~ 8 % at 1 TeV ~ 2 % < 100 GeV (η <1, standalone system)	Return flux of solenoid σ/p _T ~ 15% at 1 TeV ~ 8 % < 100 GeV (@ η=0, with vertex constraint)











写真①:日本で設計・製造された超伝導ソレノイドを液体アルゴン カロリメターに組込む作業が成功した(2004年2月)。



写真③:日本・英・米などで製造された2112台のシリコン検出器 はオックスフォード大で円筒状に組み上げられた。自動マウントロ ボットはKEKで設計されたもの(2005年1月)。



写真②:アトラス実験装置の建設風景(2004年10月):バレル液体アルゴンカロリメターとソレノイドが地下に下ろされた。



写真④:2006年春のアトラス測定器の建設風景:前後方液体ア ルゴンカロリメターとバレル超伝導トロイド電磁石が見える。





·すべてのパーツは直径12mと 18mの2つのシャフトから搬入 ·一番重いものは 280 +







The ATLAS detector is seen during assembly from the cavern wall. A calorimeter, a muon wheel and the toroid magnets are moved into place. Photograph: Claudia Marcelloni Date: 30 May 2007



The first ATLAS Inner Detector End-Cap after complete insertion within the Liquid Argon Cryostat. Photograph: Claudia Marcelloni; Max Brice Date: 30 May 2007



 $Z \rightarrow \mu^+ \mu^-$



A candidate Z boson event in the dimuon decay with 25 reconstructed vertices.

標準模型が予言するヒックス粒子とは

標準理論におけるヒッグス(Higgs)粒子

この矛盾の解決方法

<u>ヒッグス場はなぜ必要か?</u>

る

・QEDの基礎方程式が<u>ゲージ対称性</u>を持つことによりくりこみ可能(renormalizable)になり計算上の発散を回避できる

- ・電磁相互作用と弱い相互作用は電弱相互作用として統一され
- \mathbf{S} (gauge group \mathbf{F} $\mathbf{SU}_{L}(\mathbf{2}) \times \mathbf{U}_{Y}(\mathbf{1})$)

・ゲージ不変性の要求から ゲージボゾンは質量を持つことが出 来ない

フェルミ粒子(クォークやレプトンスピン)の、右巻き、

と"左巻き" で ゲージ変換性が異なる場合フェルミ粒子も質量 を持つことができない

・しかし、現実には gauge boson も fermion も質量を持ってい

・理由は基礎方程式はゲージ対称性を持っているが、真空(エ ネルギーの一番低い状態)が<u>自発的対称性の破れ</u>を起こしてい るためである

<u>ゲージ対称性</u>

場の位相を任意の場所で任意に 変えても動方程式が変わらない。

朝永・Feynman・ Schwinger,**1965** ノーベル物理学賞





物性での「自発的対称性の破れ」の例: 強磁性体

・運動方程式自身には回転対称で特別の方向があ るわけではない

・キューリー温度 T_c 以上では個々の原子の磁化の方向はバラバラである

・キューリー温度 T_c 以下では磁化の方向が揃うので、回転対称性が破れてしまう



・破れは complex doublet の scalar (自由度4) 場の self-interaction により 引き起こされるとする

・ただし、どういうメカニズムで起こるかは不明





・ 質量ゼロの 「南部・ゴールドストンボゾン」 が
 存在することになる

・ヒッグスはゲージ位相の自由度を適当に選ぶこと によって、自発的対称性が破れても"南部・ゴー ルドストーンボゾン"が発生しないことを示した





VOLUME 13, NUMBER 16

PHYSICAL REVIEW LETTERS

19 OCTOBER 1964 AUGLUME 13, NUMBER 16

(3)

PHYSICAL REVIEW LETTERS

19 OCTOBER 1964

BROKEN SYMMETRIES AND THE MASSES OF GAUGE BOSONS

Peter W. Higgs Tait Institute of Mathematical Physics, University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland (Received 31 August 1964)

In a recent note¹ it was shown that the Goldstone theorem,² that Lorentz-covariant field theories in which spontaneous breakdown of symmetry under an internal Lie group occurs contain zero-mass particles, fails if and only if the conserved currents associated with the internal group are coupled to gauge fields. The purpose of the present note is to report that, as a consequence of this coupling, the spin-one quanta of some of the gauge fields acquire mass; the longitudinal degrees of freedom of these particles (which would be absent if their mass were zero) go over into the Goldstone bosons when the coupling tends to zero. This phenomenon is just the relativistic analog of the plasmon phenomenon to which Anderson³ has drawn attention: that the scalar zero-mass excitations of a superconducting neutral Fermi gas become longitudinal plasmon modes of finite mass when the gas is charged.

The simplest theory which exhibits this behavior is a gauge-invariant version of a model used by Goldstone⁸ himself: Two real⁴ scalar fields φ_1, φ_2 and a real vector field A_{μ} interact through the Lagrangian density

$$\begin{split} L &= -\frac{1}{2} (\nabla \varphi_1)^2 - \frac{1}{2} (\nabla \varphi_2)^2 \\ &- V(\varphi_1^2 + \varphi_2^2) - \frac{1}{4} F_{\mu\nu} F^{\mu\nu}, \quad (1) \end{split}$$
e

$$\begin{aligned} \nabla_{\mu} \varphi_{1} &= \partial_{\mu} \varphi_{1} - eA_{\mu} \varphi_{2}, \\ \nabla_{\mu} \varphi_{2} &= \partial_{\mu} \varphi_{2} + eA_{\mu} \varphi_{1}, \\ F_{\mu\nu} &= \partial_{\mu} A_{\nu} - \partial_{\nu} A_{\mu}, \end{aligned}$$

e is a dimensionless coupling constant, and the metric is taken as $\rightarrow +++$. L is invariant under simultaneous gauge transformations of the first kind on $\varphi_1 \pm i\varphi_2$ and of the second kind on A_{μ}^{-} . Let us suppose that $V'(\varphi_0^{-2}) = 0$, $V''(\varphi_0^{-2}) > 0$; then spontaneous breakdown of U(1) symmetry occurs. Consider the equations [derived from (1) by treating $\Delta\varphi_1$, $\Delta\varphi_2$, and A_{μ} as small quantities] governing the propagation of small oscillations

about the "vacuum" solution $\varphi_1(x) = 0$, $\varphi_2(x) = \varphi_0$:

$$\partial^{\mu} \{\partial_{\mu} (\Delta \varphi_1) - e \varphi_0 A_{\mu} \} = 0, \qquad (2a)$$
$$\{\partial^2 - 4 \varphi_0^{\ 2} V''(\varphi_0^{\ 2})\} (\Delta \varphi_2) = 0, \qquad (2b)$$

$$\partial_{\nu} F^{\mu\nu} = e \varphi_0 \{ \partial^{\mu} (\Delta \varphi_1) - e \varphi_0 A_{\mu} \}.$$
 (2c)

Equation (2b) describes waves whose quanta have (bare) mass $2\varphi_0^{-}[V''(\varphi_0^2)^{\mu/2}$; Eqs. (2a) and (2c) may be transformed, by the introduction of new variables

$$B_{\mu} = A_{\mu} - (e\varphi_{0})^{-1} \partial_{\mu} (\Delta\varphi_{1}),$$
$$G_{\mu\nu} = \partial_{\mu} B_{\nu} - \partial_{\nu} B_{\mu} = F_{\mu\nu},$$

into the form

$$\partial_{\mu}B^{\mu} = 0, \quad \partial_{\nu}G^{\mu\nu} + e^{2}\varphi_{0}^{2}B^{\mu} = 0.$$
 (4)

Equation (4) describes vector waves whose quanta have (bare) mass $e\phi_0$. In the absence of the gauge field coupling (e = 0) the situation is quite different: Equations (2a) and (2c) describe zero-mass scalar and vector bosons, respectively. In passing, we note that the right-hand side of (2c) is just the linear approximation to the conserved current: It is linear in the vector potential, gauge invariance being maintained by the presence of the gradient term.⁵

When one considers theoretical models in which spontaneous breakdown of symmetry under a semisimple group occurs, one encounters a variety of possible situations corresponding to the various distinct irreducible representations to which the scalar fields may belong; the gauge field always belongs to the adjoint representation.6 The model of the most immediate interest is that in which the scalar fields form an octet under SU(3): Here one finds the possibility of two nonvanishing vacuum expectation values, which may be chosen to be the two Y = 0, $I_{a} = 0$ members of the octet.⁷ There are two massive scalar bosons with just these quantum numbers: the remaining six components of the scalar octet combine with the corresponding components of the gauge-field octet to describe

massive vector bosons. There are two $I = \frac{1}{2}$ vector doublets, degenerate in mass between $Y = \pm 1$ but with an electromagnetic mass splitting between $I_3 = \pm \frac{1}{2}$, and the $I_3 = \pm 1$ components of a Y=0, I=1 triplet whose mass is entirely electromagnetic. The two Y = 0, I = 0 gauge fields remain massless: This is associated with the residual unbroken symmetry under the Abelian group generated by Y and I_{s} . It may be expected that when a further mechanism (presumably related to the weak interactions) is introduced in order to break Y conservation, one of these gauge fields will acquire mass, leaving the photon as the only massless vector particle. A detailed discussion of these questions will be presented elsewhere.

It is worth noting that an essential feature of the type of theory which has been described in this note is the prediction of incomplete multiplets of scalar and vector bosons.⁶ It is to be expected that this feature will appear also in theories in which the symmetry-breaking scalar fields are not elementary dynamic variables but bilinear combinations of Fermi fields.⁹

¹P. W. Higgs, to be published,

127, 965 (1962).

³P. W. Anderson, Phys. Rev. <u>130</u>, 439 (1963).

⁴In the present note the model is discussed mainly in classical terms; nothing is proved about the quantized theory. It should be understood, therefore, that the conclusions which are presented concerning the masses of particles are conjectures based on the quantization of linearized classical field equations. However, essentially the same conclusions have been reached independently by F. Englert and R. Brout, Phys. Rev. Letters 13, 321 (1964): These authors discuss the same model quantum mechanically in lowest order perturbation theory about the self-consistent vacuum. ⁵In the theory of superconductivity such a term arises

from collective excitations of the Fermi gas. ⁶See, for example, S. L. Glashow and M. Gell-Mann,

Ann. Phys. (N.Y.) 15, 437 (1961).

¹These are just the parameters which, if the scalar octet interacts with baryons and mesons, lead to the Gell-Mann-Okubo and electromagnetic mass splittings: See S. Coleman and S. L. Glashow, Phys. Rev. <u>134</u>, B671 (1964).

⁸Tentative proposals that incomplete SU(3) octets of scalar particles exist have been made by a number of people. Such a rôle, as an isolated Y = 1, $I = \frac{1}{3}$ state, was proposed for the κ meson (725 MeV) by Y. Nambu and J. J. Sakurai, Phys. Rev. Letters <u>11</u>, 42 (1963). More recently the possibility that the σ meson (385 MeV) may be the Y = I = 0 member of an incomplete octet has been considered by L. M. Brown, Phys. Rev. Letters 13, 42 (1964).

⁸In the theory of superconductivity the scalar fields are associated with fermion pairs; the doubly charged excitation responsible for the quantization of magnetic flux is then the surviving member of a U(1) doublet.

SPLITTING OF THE 70-PLET OF SU(6)

Mirza A. Baqi Bég The Rockefeller Institute, New York, New York

and

Virendra Singh* Institute for Advanced Study, Princeton, New Jersey (Received 18 September 1964)

(1)

1. In a previous note,¹ hereafter called I, we proposed an expression for the mass operator responsible for lifting the degeneracies of spinunitary spin supermultiplets [Eq. (31)-1]. The purpose of the present note is to apply this expression to the 70-dimensional representation of SU(6).

The importance of the 70-dimensional representation has already been underlined by Pais.² Since

$35 \otimes 56 = 56 \oplus 70 \oplus 700 \oplus 1134$,

it follows that <u>70</u> is the natural candidate for accommodating the higher meson-baryon resonances. Furthermore, since the $SU(3)\otimes SU(2)$ content is

$\underline{70} = (\underline{1}, \underline{2}) + (\underline{8}, \underline{2}) + (\underline{10}, \underline{2}) + (\underline{8}, \underline{4}), \tag{2}$

we may assume that partial occupancy of the $\underline{70}$ representation has already been established through the so-called γ octet² ($\frac{3}{2}$)⁻. Recent experiments appear to indicate that some ($\frac{1}{2}$)⁻ states may also be at hand.³ With six masses at one's disposal, our formulas can predict the masses of all the other occupants of $\underline{70}$ and also provide a consistency check on the input. Our discussion of the $\underline{70}$ representation thus appears to be of immediate physical interest.

wher

²J. Goldstone, Nuovo Cimento <u>19</u>, 154 (1961); J. Goldstone, A. Salam, and S. Weinberg, Phys. Rev.



ゲージの自由度で $\phi_2 = 0$ とすることが出来る (ゲージは固定、自由度はなくなる) $\phi_1 = V + \eta$ \uparrow v を真空期待値という η は谷底にいるので変化するにはエネルギーがいる

→ 質量を持っている

電弱相互作用(グラショー・ワインバーグ・サラム)

- ・電磁相互作用と弱い相互作用は電弱相互作用として統一される
- $gauge group \Rightarrow SU_{L}(2) \times U_{Y}(1)$
- ・gauge 不変性の要求から ゲージ粒子 は質量を持つことが出来ない



2 はそれまで知られていなかった中性カレント

Radioactive decays of polarized Co⁶⁰ (Wu et al. 1957)



中性カレントの発見 泡箱 Gargamelle @ CERN PS (1973)

 $\overline{v}_{\mu} + e^{-} \rightarrow \overline{v}_{\mu} + e^{-}$

(弾性散乱) Recoil electron energy = **400** MeV

($\overline{\nu}_{\mu}$ beam from π^{-} decay in flight)



非常に小さな cross section でしかない



- ・現実には gauge boson も fermion も質量を持っている
- ・理由は真空が自発的対称性の破れを起こしているためである
- ・破れは complex doublet の scalar (自由度4)場の self-interaction により引き起こされる
- SU_L(2) の3つの gauge parameter を選ぶことにより scalar 場のうちの3つの自由度を 消すことができる
- ・残り1つは scalar 場の絶対値で、「真空期待値+Higgs 場」である
- ・真空期待値がゼロでないので、 gauge boson は scalar 場との相互作用から質量を持つことになる
- ・gauge boson の質量は理論の枠組みの中で一意的に決まる
- ・3個の gauge boson (W+, W-, Z) が質量を持ち、各々 helicity=0 成分を得ることになって
 自由度が合計3つ増えた分は、消えた scalar 場の自由度に対応する
- ・Z と A(光子) は SU(2) の中性 gauge boson と U(1) の gauge boson の linear combination で表され(この回転角が Weinberg angle)、A は massless である
- ・「自発的対称性の敗れた真空」は $U_{em}(1)$ gauge 変換に対しては破れていない (ゲージの自由度は 残っている)

- ・Fermion の質量も fermion と scalar 場の相互作用から得られる (Yukawa coupling) ・但しその相互作用の強さは理論の枠組みの中では決まらず、 外から手で入れる
- ・Fermion と Higgs の相互作用は fermion の質量に比例する
- ・quark の質量固有状態と weak 相互作用の固有状態は異なるため、up-type から down-type quark へ変える charged current 相互作用には Cabibo-Kobayashi-MasuKawa matrix が現 れる




ヒッグス粒子の生成断面積



ヒッグス粒子の崩壊比率



m_H = 125.5 GeV/c² **0時**

BR(H \rightarrow ZZ) = 2.8% BR(H $\rightarrow \gamma\gamma$) = 0.24% $\Gamma_{\text{total}} = \Gamma_{\text{WW}} + \Gamma_{ZZ} + \Gamma_{\text{bb}} + \Gamma_{\gamma\gamma} + \cdots$

$$BR(H \rightarrow ZZ) = \frac{\Gamma_{ZZ}}{\Gamma_{total}}$$



Events/500 MeV for 100 fb⁻¹



ヒッグス粒子発見能力



ヒッグス粒子の質量がどこにあっても 100 fb⁻¹ のデータで 10 σ 以上で発見できる





Run Number: 204769, Event Number: 24947130 Date: 2012-06-10 08:17:12 UTC $H \rightarrow \gamma \gamma$



fife $m_{\rm H} = 126.8 \pm 0.2 (\text{stat}) \pm 0.7 (\text{syst}) \text{ GeV}/c^2$

断面積の理論値との比較

$$\frac{\sigma_{\text{experiment}}}{\sigma_{\text{SM}}} = 1.57 \pm 0.22 \text{(stat)}^{+0.24}_{-0.18} \text{(syst)}$$

どうやってヒッグス粒子の質量を求めるのか?

$$E = \sqrt{m^2 c^4 + p^2 c^2}$$
 だから $m^2 c^4 = E^2 - p^2 c^2$
 $p^2 = (\vec{p})^2 = p_x^2 + p_y^2 + p_z^2$

ヒッグス粒子が2個のγに崩壊したとすると、エネルギーと運動量の保存則から

$$E_{Higgs} = E_{\gamma 1} + E_{\gamma 2}$$
$$\vec{p}_{Higgs} = \vec{p}_{\gamma 1} + \vec{p}_{\gamma 2}$$

だから

$$m_{Higgs}c^{2} = \sqrt{\left(E_{\gamma 1} + E_{\gamma 2}\right)^{2} - \left(\vec{p}_{\gamma 1}c + \vec{p}_{\gamma 2}c\right)^{2}}$$

2個の γ に崩壊する場合に限らず何個の粒子に崩壊する場合で も同様な方法が使える





$H \rightarrow ZZ^{(*)} \rightarrow 4\ell$



 $rac{\sigma_{ ext{experiment}}}{\sigma_{ ext{SM}}}$ =1.7±0.5







- Masses of the two Z bosons
- Production angle $\,\theta^*$
- Four decay angles Φ_1 , Φ , θ_1 and θ_2

BDT はこれらのこれらを用いた多変数関数

 $J^{P} = 0^{+}$ に良く合っている

J^P=0- を 97.8% の確からしさで排除

まとめ

標準理論のヒッグス粒子として矛盾は見られない
生成断面積、崩壊比率、スピンとパリティ

・ ヒッグスと断定するにはさらなる精度が必要、特にフェルミオンとの結合の強さが質量
に比例していることを確認する必要がある

- ・ 標準理論ではヒッグス粒子は1個だけなのに対し例えば超対称性模型では5個
- - ダークエネルギーの正体は?
 - 宇宙創成時にインフレーション起こした正体は?
 - 4つの力の強さがこれ程絶妙なからくりは?
 - 宇宙空間で物質だけが残ったメカニズは?
- 今のところ超対称性粒子やその他の標準理論を越える理論が予想している粒子は見つかっていない